法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-29

<文献紹介>漆原和子・藤塚吉浩・松山洋・大西宏治編『図説・世界の地域問題』

佐藤, 典人 / SATO, Norihito

(出版者 / Publisher)
法政大学地理学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政地理 / JOURNAL of THE GEOGRAPHICAL SOCIETY OF HOSEI UNIVERSITY
(巻 / Volume)
40
(開始ページ / Start Page)
69
(終了ページ / End Page)
70
(発行年 / Year)
2008-03-10

【文献紹介】

漆原 和子・藤塚 吉浩・松山 洋・大西 宏治 編（2007）『図説・世界の地域問題』ナカニシヤ出版，174 頁，2500 円

今，手元に届いた標記の本が私の机の上に広げられている．様々な地域のカラー写真で表紙が彩られているB5版のこの書籍は，総勢45名の執筆者の手によって著わされたものである．「まえがき」にも記されているように，この書籍は教育現場にいる方々への教材的な役割を意識して世界各地の地域問題を多角的・総合的に取り扱っている．空間スケールと大陸別を考慮して地域問題が配列され，全体で80のテーマを選出している．また，適切な図表や写真を豊富に挿入し，左右2ページで一つの話題が完結するように組まれている点や，奇数ページ右端に大陸別の地図を活かした形でインディックス的役割を保持させている点などは，読み手への配慮が伺える．本書の構成と各々で扱われているテーマの数は，

総論	3	題
世界	8	〃
オセアニア	6	〃
アフリカ	8	〃
ラテンアメリカ	7	〃
アングロアメリカ	6	〃
ヨーロッパ	11	〃
アジア	17	〃
日本	14	〃

であり，アジアや日本がやや多い．

本書で扱われている地域問題の内容は，当然のことながら多岐にわたっている．よって，それらを類型化してでも遺漏なく紹介するには，評者の力量が到底及ばない．それゆえ指定された紙幅の許す限り，目に止まったいくつかの事項を取り上げて気づいた点に触れるに留め，本会の会員諸氏への紹介に置換したい．まず最初の

1．世界の地域問題

という項目で，「地域問題の視点」と称して，スケールへの配慮の重要性を説いている点は，極めて重要な言及である．このスケールへの注意の喚起は，大気現象を対象にする，いわゆる“気候屋”にとっては不可欠で，かつ当然であるものの，ややもすれば，それ以外の分野では見逃される嫌いがあり，その点で多々疑問を抱く場に直面した覚えすらある．

次に全世界の地域問題をその要因から3つに大別している．すなわち，それらは自然現象が主因のもの，人間活動が主因のもの，相互に両者が関り合って発生するものである．けれども65億余の人口を抱える地球上で，地域問題をこの視点に立脚して整然と分類できるものだろうかという極めて単純な疑問が浮かんだ．それとも，逆にそのような類型化が客観的に容易な事項のみを取り上げたのだろうか．

最近のIPCCの会議・報告に絡んで，巷間，関心を集めている『地球温暖化』の話題へ移ろう．

6．世界における氷河の後退

なお，これに繋がる話題と思われる，15．地球温暖化の被害を受けるツバル，23．アフリカの高山における氷河の後退と植生の遷移，26．南北アメリカ大陸の氷河の消長，40．温暖化によるスイス・アルプスの変化，なども本書には登場する．

ところで，周知のように氷河の拡大･縮小，すなわち，氷河の消長を把握するには2つの指標がある．1つは氷河の末端位置の変化である．つまり，上流から流下する氷の量と融解して無くなる氷のそれとが等しくなる場所で氷河は消失するため，この末端位置は氷河の動向を表示すると考えられる．

もう一方の指標は氷河の質量収支である．厳密に申すと，これには2つの意味があるけれども，通常は氷河の涵養量と消耗量との収支を指し，両者の均衡は氷河の定形・不変の存在に連動する．

本書でも触れているように，近年の温暖化によって世界の氷河は全体的に縮小傾向にある．が同時にその一方で，ニュージーランド南島の西海岸に下る氷河のように拡大傾向のそれも存在し，一見，矛盾するように思える．ここで注意を要することは，氷河の消長を左右するのは気温変化のみではない点である．それには降水量の増減も大きな影響を及ぼし，それゆえ，降水の少ない乾燥域の氷河が，蒸発の割合も無視できないために，結果として消耗が激しい．さらに氷河の涵養時期は冬季で，消耗時期が夏季と必ずしも限らない点である．例えば，ヒマラヤの氷河は夏季に涵養も消耗も同時に生ずる．これに気温の季節変化などを加味すると，ヒマラヤの氷河の消長はとても微妙な反応の合算結果を示していると言える．

最近の山岳氷河の後退は，氷河末端に形成される氷河湖の拡大を招来し，ターミナルモレーンの決壊とその下流部での洪水が危惧されているのは，本書の指摘とおりである．この項の図1に示されている世界の氷河の縮小状況には，アラスカやグリーンランド，さらには中央アジアやニューギニアなどのそれも包含されているのか不明である．とくに上述した氷河の涵養時期が夏季の場合と冬季の場合の消長傾向が同一なのか否か，あるいは，海洋性の湿潤氷河と内陸性の乾燥氷河で消長傾向に差があるのか否かなども教示して欲しいと感じた．

さらに自然現象に絡む地域問題を追ってみたい．

20．サヘルの干ばつ・砂漠化と人々の生活

この問題は1970～80年代を中心に指摘され，ユネスコのリポートなどでも報じられた．サハラ砂漠の南縁を占めるこの半乾燥地域は，気候条件として作物栽培を営むにはほぼ限界に近い．それゆえ，年々の大気の状況，とりわけ降水量の多少によって住民の生活は大きく脅かされる．この地域へ夏季を中心に降水をもたらす主因は，ギニア湾側から北上する熱帯収束帯の接近である．けれどもこの収束帯の変位が毎年，同じような緯度まで北上するとは限らないので，降水量の安定性を欠く．サヘルの諸国が世界を意識した換金作物への依存を含む何らかの対応策で食糧を確保できた間は，この問題が表面化しなかった．潜在的に徐々に脆弱化した生活基盤を露呈させたのは，他ならぬ不安定な降水量であった．国からの援助も期待できずに対応を余儀なくされた住民は，家畜を飼ったり薪炭材の

採取に頼る結果となった．それが余計に貧弱な植生を蝕み，結果的には耕地の荒れ地化や放棄，さらには難民化，都市への人口集中などを招来する負の循環に陥った．よって，少雨という気象条件が契機こそなれ，飢餓を招いた根本的な原因でない点に注意を要する．その点で食糧自給率の向上は極めて大切であり，わが国にとっても“他山の石”とすべきなのだが？少なくとも，サヘルの場合，住民への教育や農業基盤の整備，さらには地域性を考慮した長いスパンで見通す支援策が抜本的には必要かと思われる．

本書で扱われている，13．オーストラリアにおける砂漠化の進行，21．アフリカ牧畜民のくらしと民族紛争，22．アフリカ農業問題，24．ナイロビの都市スラム問題，32．リマにおける肥大化するスラム，などもこれと無縁な内容ではない．次の問題は，

16．オーストラリアの多文化主義と移民問題

である．この項目を読むと即座に“白豪主義”という言葉を想起するであろう．オーストラリアは，かつて白人だけの国造りを目指す政策を採ったけれども，第二次世界大戦後の労働力不足を補う必要性などから，この白豪主義を廃止した歴史的な背景を有している．それにより，隣接するアジアからの移民が増えて，いわゆる多文化社会へシフトしてきた経緯もこの国にはある．しかし近年，自国の総人口に占めるアジア系移民，ないしその子孫の比率が高くなるにつれて，この多文化主義への批判が強まってきた．換言すれば，これはある種の人種差別であり，自国民優位を訴える排他的ナショナリズムとも言える．この国民感情の一端は，海面上昇に伴う島嶼水没の危機を逃れようと，移住を打診したツバルからの受け入れを拒絶した姿勢にも伺え，一定枠の移民を容認したNZの対応と大きく異なる．考えてみれば，元来，アボリジニを象徴とする先住民の居住地へ，英国の都合で送り込まれた流人に遡ると言われる自国の祖先をどう位置付けるのであろうか．

ナカニシヤ出版

経済成長の成熟に符合する人口の少産少死型への転換は，人口増加率の低下，人口構成の変化，生産年齢人口の減少，高学歴化，人件費の高騰などに連動し，いわゆる先進諸国の辿る道である．それでも先進諸国は産業構造の維持，安価な労力の確保，3Kと呼称される職種の必要性などから，人の国際移動が生ずる．言語はもとより文化や習慣，宗教などが違う人間の移住には，自ずと軋轢が生まれて衝突の起こる可能性を常に秘めている．国境が地続きの国ならばまだしも，日本のような島国などは，歴史的にも隣国からの人の出入りに不馴れであったために，余計にこのような流入が不安視される．煎じ詰めれば，本書での25．南アフリカ共和国・アパルトヘイト都市，47．少子化時代のスペインにおける外国人の急増，なども根は同類と見られ，今後，さらにこの種の問題が顕在化すると評者は案じている．その意味で，伝染病の蔓延や治安維持への対策を含め，その昔，一読した半村良の『東北自治区』なる小説の内容を一笑に付してばかりも居られないのでは？と痛感しつつも，彼の先見性にいたく感心する昨今である．

与えられた紙面も少なくなったけれど，日本国内の懐かしい問題を1つだけ指摘しておきたい．それは

74．百瀬川扇状地の治水と地下水

である．かなり以前に現場を数回，訪れた地域だが，最近のその変容ぶりに驚愕しながら現地に対する認識を新たにした．要は，いつでも，どこでも人間サイドの思惑のみで自然を弄る際には，それまで営々と構築してきたであろう自然界のバランスを突如，崩すことに変わりはないので，その許容範囲を多角的に的確な把握をした上で手を加えることが肝心なのである．

ところで，世界の地域問題と言えば，地域間紛争と直結する場合が多い．でも本書でそれに類するのは，21．アフリカ牧畜民のくらしと民族紛争，くらいしか目に入らない．確かに社会学や政治学との垣根も問われるけれども，見逃すことのできない地域紛争のいくつかにも，やはり本書で触れて欲しいと感じた．と言うのも，経済的な側面を追求すると，現在の世界の大抵の国土面積では狭過ぎる半面，民族や宗教をベースに考究すれば，今日のその面積でも広すぎるという，矛盾するベクトルの向きの衝突が，いくつかの世界の地域間紛争に瞥見されるので，そこへの本書の多才な執筆人の切り口を拝見したかったからに他ならない．

さらに現代的・将来的に注目される問題として，従来の化石燃料を中核とするエネルギー資源の立地とその配分を巡る問題，および自然エネルギーを包含する新代替エネルギーの開発を目論む世界的な新展開に絡む大陸間，ないし地域間の問題などにも触れられるならば，今後を睨む意味でも，より息の長いテーマを網羅した形となったであろう．

いずれにせよ，巻末の参考文献も含めて多くの新知見を得る著書には変わりはないので，是非，本書を手にとって一読を勧めたい．

（佐藤　典人）